



豪快な看護

こじま みえこ
【小嶋 美恵子・大阪府】

3年前、85歳の母が腰の骨を骨折して、寝たきりになった。もちろんオムツ対応で、残尿がたまりやすく発熱する。入院して3カ月、介護施設への入所を断って在宅で介護をすることにした。

そうなると、尿道に管を入れて残尿を私が定期的に取りなければならない。家に帰れば看護師さんもない。不安が頭をよぎる。

病院で、残尿を取る導尿の練習をすることになった。

初めての練習の日、看護師さんとの約束の時間に行くと、彼女はもう私のことを病室で待っていた。椅子に反対向きに座り、背もたれの上に太い腕を組んでいた。豊満な胸が一番に目に入り彼女の目を見る余裕はなかった。

開口一番、「あんた、ホンマにこんな状態で家に連れて帰るの？ 心も体もズタズタになるで」。

そんな言い方をされても、腹は立たなかった。それどころか、本当のお姉ちゃんに怒られているような温かい感情すら湧いている自分が不思議であった。

「家で看取ります」と言うと「しゃあないなあ。教えたろか」。

導尿の練習が始まった。母の年齢では、肉が垂れ下がって、尿道がどこにあるか分からない。管を持つ手が震える。背中にスーと汗が流れる。

「もうちょっと右や！そこ下に向けて！」。彼女が叱咤(しった)する。

「よしや！ 出た。なかなか根性あるな。OKや」。

何とか無事に導尿ができて、ホッとしている私の背中から、

「ええか、つらくなったら、いつでも逃げんねんで！ 誰もアンタを責めたりせえへんよ。もしそんな奴がいたら自分でやってみい！ と言うたれ！ 導尿OK！ ハハハハハ」。豪快な笑い。

弟がいながらいつも一人で父の看取りもした私にとっては、百人力の気持ちをいただいた。

母も米寿を迎え、時折つらい時は、あの太い腕と豊満な胸と豪快な笑いを思い出す。